

英語学習における視聴覚機器の活用実践

～ 授業展開の効率化, 教材の共有化, 分かる授業をめざして ～

村山市立葉山中学校 遠藤 広済

1 テーマの設定

本校は教科教室型の教室運用をしている。英語科においても英語科専用の教室と、それに隣接する学習スペースを持っており、教科担任が自由に使用し、生徒が学びに来たくなるような学習環境を目指している。教科1つの教室を複数の教員が使用するので授業後に準備したものを撤収しなければならないという点では他の多くの学校と同じであるが、掲示物や視聴覚機器等を固定できるので、授業を仕組む上では大変恵まれた環境である。

普段の自分の授業を顧みると、ある程度パターン化しているように思う。順番は扱う題材や言語材料、言語活動等によって異なるが、①前時の復習、②新出文型の導入、③新出単語の発音練習、④教科書本文の内容理解、④教科書本文の音読、⑤新出文型を用いたドリル、⑥新出文型を用いた言語活動、⑦板書等のまとめ、という展開を1単位時間内に行うことを意識している。しかし、これは理想に終わることが多く、十分に活動時間を確保できなかつたり次時に活動を持ち越してしまったりすることが多い。英語の学習において雰囲気は大切である。活動に集中させ次の活動に関心をつなぎ、ねらいを達成させるためには勢いも大切であると感じている。先に挙げた活動で特に効率が悪いと感じているのが⑤新出文型を用いたドリル活動である。例文や絵の提示の仕方には改善の余地がある。

また、以前から授業準備の効率の悪さも感じてきた。同じような学習プリントを毎年作り直しているような感覚に陥るときがある。学習プリントをデータとして蓄積していても、教科書改訂等の理由で英文が変化すると、学習プリントもそれに対応して変えなければ使えない。また、文型の説明のために準備した絵などの資料や教科書の内容理解のために準備した英文等も、紙製のものがほとんどなので、長く保管ができない。結局、全部最初から作り直してしまうことがほとんどであった。しかし、教材の蓄積の

仕方を整理すれば新出文型の練習くらいは確立したものを蓄積できそうなものである。さらに、幸いにも本校には英語科教員が3人おり、少なくとも同じ職場の英語科教員同士で教材を共有すれば、複数の教員の手でよりよい教材を蓄積していくことができると考える。

本委嘱研究は2年間の期間であるので、教材の共有化までには至らないことが考えられるが、授業展開の効率化と教材の共有化をめざすことを基本としながらも、分かる・楽しい授業にするために視聴覚機器の活用実践例を積み上げることを目標とし、授業改善に取り組みたいと考えた。

2 研究の仮説

[仮説1]

コンピュータディスプレイやビデオを積極的に活用すれば、授業展開の効率化を図ることができるであろう。その結果として生徒の学習活動量を増やすことができ、学習事項の定着もよくなるであろう。

～パワーポイントとメディアボードの活用～
※Microsoft PowerPoint 2007を使用

[仮説2]

デジタルコンテンツ化した教材を共有し、改良、蓄積していけば、授業準備の効率化が図れ、より確立した教材を開発できるであろう。

3 研究の方法と計画

[仮説1に関して]

- (1)言語材料や題材に応じた教材の開発
- (2)授業での活用
- (3)生徒の活動の様子の観察, テストの実施, 考察
- (4)教材の改良
- (5)反復練習材料としての提示

◆上記(1)～(5)を繰り返し、教材データを蓄積し必要に応じて改良していく。また、週案簿の記

録を観察し、1単位時間あたりの学習活動量と進度を観察し、授業展開を改善する。

[仮説2に関して]

本校には英語科教員が3人おり、チームティーチングも積極的に取り入れている。しかし、基本的に1学年を1人で担当する体制である。同時に2人が同じ教材を共有することはない。従って研究初年度は、できるだけ教材をデジタルコンテンツとして残し、2年目以後から共有、改良を試みていく。また、メディアボードを積極的に活用し、活用実践例を蓄積し、他の英語科教員にも広げていく。

以上、2つの仮説を基本として研究に取り組むが、あわせて、黒板、ホワイトボード等の各メディアの使用場面や組み合わせについても実践を積み重ね、成果と課題を残したい。

4 研究の実践

まずパワーポイントのメリットが英語科の学習活動のどの場面で発揮されるのか考えてみた。パワーポイントのメリットとして、以下の点が考えられる。

- (1)板書と比べ、情報の提示が瞬間的に行える。
- (2)文字情報だけではなく、動きのある映像や音を同時に提示できる。
- (3)変化のある映像を仕組むことにより生徒の視点を無理なく集中させることができる。
- (4)何度でも同じ情報を必要な時に提示できる。
- (5)一度教材として開発すれば何度でも使え、教材としての保管が容易である。
- (6)パワーポイントを所有している複数の教員で、教材の共有が可能である。
- (7)書式が決まれば文字情報等を入れ替えることにより、容易に改良が可能である。また、同種の教材を作りやすい。

パワーポイントのメリットが発揮される条件として以下の点が考えられる。

- (1)授業を受けている全員に見える大きさ、明るさ、色で情報が提示できること。
- (2)生徒がどこに視点を集中すればよいのか指示が徹底していること。

以上の条件を満たすために、大型のディスプレ

イ機器は必要不可欠である。幸いにも本校には各階にメディアボードが1台ずつ配置されており、必要なときに自由に移動・使用できる。

さらに、メディアボードのタッチスクリーン機能を使えば、パワーポイントと連動して以下のことが可能になる。

- (1)画面をロックすれば、コンピュータのクリックと同じ効果が得られる。
- (2)ペン機能を使えば、ディスプレイを指圧した部分に印をつけることができる。
- (3)文字をオブジェクトとして設定すれば、文字の並べ替え等の移動がコンピュータディスプレイ上で可能である。

※(3)をより効果的に活用するにはワード(Microsoft Word)のテキストボックスや図形のような扱い方ができるアプリケーションの方が有効である。

【実践例1】

◆基本的な授業展開の中での使用例1

- ・単元：Unit 7 My Favorite Movie (NHEC.Book2)
- ・目標：日本語や絵の内容を比較級、最上級を使って言うことができる。

本時では比較級(例 **stronger**)、最上級(例 **strongest**)を用いて下(資料1)のような絵の内容を言い表すことができるようにすることを目標とした。



目標を達成するにあたって、次のような指導過程を考えた。

- ①ビデオを見せ、本時に学習する英語の響きを聞かせる。
- ②比較級、最上級の形、音、用法を説明する。
- ③語形変化の発音練習をさせる。
- ④比較級、最上級を用いて絵の内容を言い表す練習をさせる。
- ⑤教科書の本文中の比較級、最上級に着目させ、内容理解、発音練習に取り組ませる。

⑥比較級，最上級の形，意味を確認し，要点をノートに整理させる。

①の活動では，比較級・最上級を題材にした漫才を生徒に見せた。

②では黒板に比較級・最上級の例文を提示し，意味，形，音の特徴を説明した。

③ではホワイトボードに，本時扱う形容詞の原級，比較級，最上級の一覧を掲示し，教師の後に続いて単語の発音をさせた。

④ではメディアボードを使って比較級・最上級の英文を口頭で作文させた。活動するにあたり，下図(資料2)のような教材をパワーポイントで作成し使用した。その後，資料1のカードを使ってペアで口頭作文練習をさせた。



⑤は比較級・最上級の意味や形，音について教科書の英文を用いて整理するつもりで行った。本文中の新出単語の発音練習をするにあたりフラッシュカードをパワーポイントで作成し使用した(資料3)。また，英文の音読では，スライドショーを用いて意味のまとめりごとに英語を提示した。



⑥では，②の活動で説明したことを，パワーポイントを用いて再度説明し，本時のまとめとなるようにした。

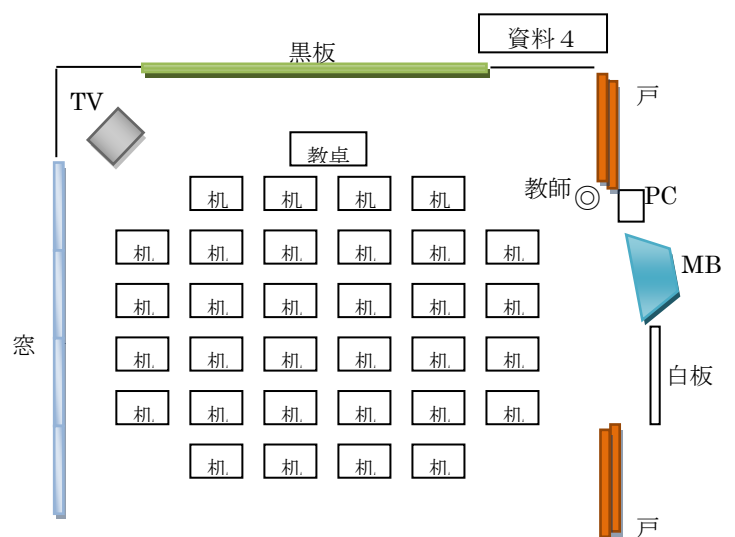
④の比較級・最上級の英文を作る練習の場面では，パワーポイントは時間短縮に大いに有効

であった。また，教師の音声に合わせて画面を変化させることにより，聴覚と視覚の両面から情報を提示することができ，英語が苦手な生徒であっても教師が意図した英文を言えるようにすることができた。板書に比べて教師が生徒の表情を観察しながら練習を進めることができたことも目標達成につながったと思われる。また，⑤時の新出単語の練習場面では，パワーポイントを使用することにより資料3の写真のように文字と絵の提示が可能となり，結果として授業の雰囲気や和ませ練習への集中力を高めることができた。スライドショーを使って教科書の英文音読をすることも同様の効果が得られた。さらに，テレビ，黒板，メディアボードの3つのメディアを使用することにより，物理的な視線の変化が生まれ，集中力を継続することができたと思う。

この授業を通して，以下の点について研究をしなければならないと思った。

- (1)メディアボードの位置
- (2)メディアボードを操作する位置
- (3) 黒板・ホワイトボードとメディアボードのそれぞれの良さ
- (4) 生徒の視線を移動させるタイミング

(1)(2)については教室の構造や生徒数等の物理的な制限に加え準備の都合がある。何度かメディアボードを使用する授業を通して研究1年時では次のような配置(資料4)に落ち着いた。

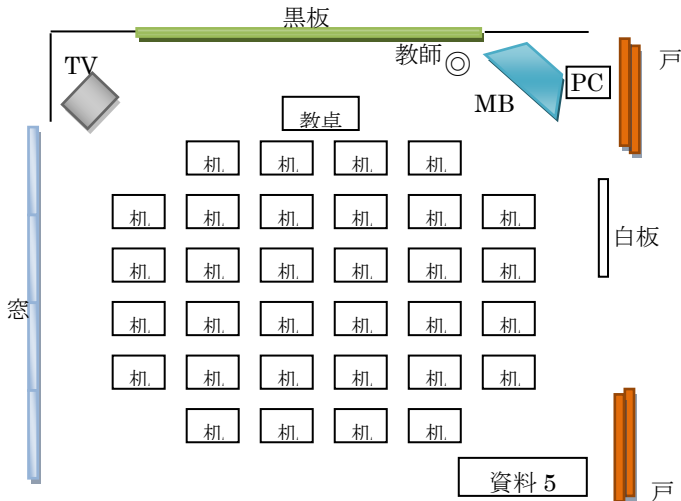


注) MB=メディアボード，白板=ホワイトボード

TVは備え付けのため，移動不可能

しかし，研究2年目からは，本校の教科教室型を生かし，メディアボードとコンピュータを次の

ような配置(資料 5)に固定しており、生徒もスムーズに視線を移動させている。このことにより、研究1年時は、授業のたびにコンピュータとメディアボードをセッティングしていたのが、現在では、フラッシュメモリー等のメディアを持ち運びするだけになり、準備がかなり簡単になった。



(3)についてメディアボードを使用するメリットについては先に述べた。黒板のメリットは臨機応変に情報を提示できることであると思う。メディアボードのタッチスクリーン機能を使えば同様の効果は得られるが、感度がさほどよくないため黒板には及ばない。メディアボードに黒板の良さを補うために、必要に応じてホワイトボードを配置している。また、メディアボードには変化のある視覚的な資料を提示し、黒板には変化のない視覚的な資料を提示する等の組み合わせも大切である。特に後者は生徒が既習事項を忘れた場合でも任意に復習させる材料と機会を与えることができるという点で有用である。(4)はこの点でも留意するべきである。

【実践例 2】

◆基本的な授業展開の中での使用例 2

- ・ 単元：Speaking Plus 3 道案内・乗り物での行き方をたずねる・教える (NHEC. Book2)
- ・ 目標：電車での行き方を尋ねたり教えたりすることができるようにする。

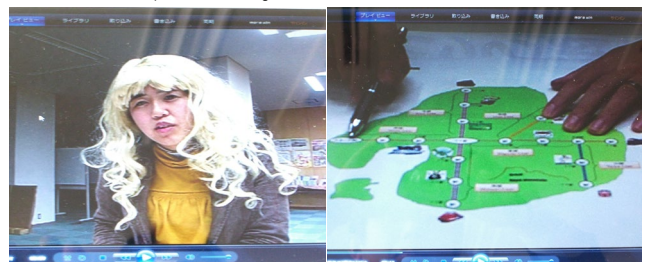
本時では、「教えてください」「～への行き方」「～に乗りなさい」「～で降りなさい」「～で」等の意味の英語を組み合わせ、目的地への行き方を尋ねたり教えたりすることができることを目標とした。

目標を達成するにあたって、次のような指導

過程を考えた。

- ①ビデオを見せ、目指す姿を示す。
- ②モデル文の音読練習をさせる。
- ③必要な表現を素早く引き出し、言えるように練習させる。
- ④駅員と旅行客の役割を分担し、電車での行き方を尋ねたり教えたりする活動に取り組みさせる。
- ⑤本時に学習した表現を振り返らせる。

①の活動では、本時の活動のゴールを明確にするために、本時扱う表現や使用する物、話者の動きを盛り込んだ自作ビデオを視聴させた。課題の明確化という目的以上に、授業の雰囲気づくりに役立った。



②では、パワーポイントのスライドショーを用いて、英語を意味のまとまりごとに提示し、会話の内容を捉えさせながら、教師の後に続いて英文を音読させた。スライドショーを用いることにより、次にどのような情報が提示されるのか期待させながら読み進めることができるので、内容理解と音読練習を短時間で済ませるのには有効であったと思う。

Woman: Could you **tell me how to** get to **Ueda**?

Man: Sure.

Take the train to Mita.

Change trains there.

Woman: **How many stops** is **Mita** from **here**?

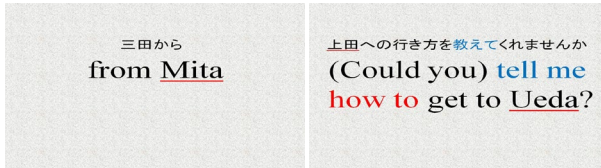
Man: (Mita is) **Three stops** (from here).

Woman: **Which line** should I take from **Mita**?

Man: **Take the Kita Line.**

③では、必要な表現について、意味のまとまりごとにパワーポイントでスライドを作り、英単語のフラッシュカードの要領で発音練習させた。その後、カード化したものを生徒に配り、日本語から英語への変換を素早くできるようにペアで練習させた。自力解決(英語→日本語の変換)の前後にパワーポイント教材を用いることにより、活動前後の生徒の様子を比較し、定着を確かめることができた。同様のことは紙面でもできるが、いつでも、何度でも、という使用

回数、視線の焦点化という点においては、パワーポイント教材の方が優れていると思う。



本授業を通して、[仮説1]の授業展開の効率化という点においては、コンピュータディスプレイの活用は、特に③の活動において、有効であると思われる。しかし、①のビデオ教材については、使用場面の検討が必要であると思われる。今回のような展開の場合は、次の場面において有効であると思われる。

- (1)目標とする姿の提示(課題の提示)
- (2)目標の確認(達成までの見通しの提示)
- (3)目標との比較(達成度の確認)

今回は、上記(1)しかビデオ教材の効果を期待していなかった。しかし、字幕を付けるなどして、発話されていることを文字化し、どのような表現を取得することが必要とされているのか見せることにより、(2)は達成することができたと思う。また、ビデオと同時に発音させたり、同じ時間内で会話をさせたりすることにより、(3)の達成ができたと思う。さらに、自分の姿をビデオに収め、視聴することができれば、よりよい効果が得られたと思われる。

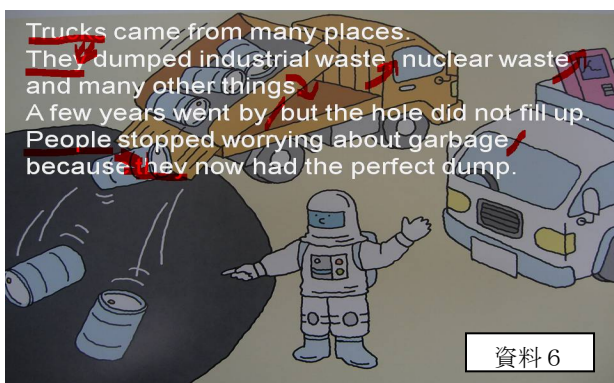
【実践例3】

◆生徒の発表の道具として使用する例1

- ・単元：Let's Read 2 Can Anyone Hear Me? (NHEC.Book2)
- ・目標：物語のあらすじを説明することができる。

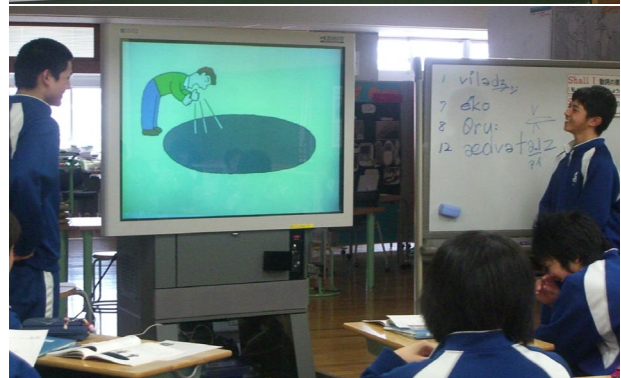
本単元では比較的長い英文を一気に読んで、その内容を日本語または英語で説明することを目標とした。

内容理解・発表練習の場面では資料6のよう



な教材を用いた。発表練習の際は、最初に絵だけ見せてどんな言葉を述べるのか考えさせ、その後、教科書の本文を例として提示して音読させた。また、パワーポイントのペン入力機能とメディアボードのタッチパネル機能を組み合わせて内容理解・音読の手助けとした。

英語による物語のあらすじ発表に際して、支援策として資料7のように黒板に絵とその場面のあらすじ説明に必要な不可欠な語句を提示した。タッチスクリーン機能への興味もあり、生徒は意欲的に発表に臨んだ。

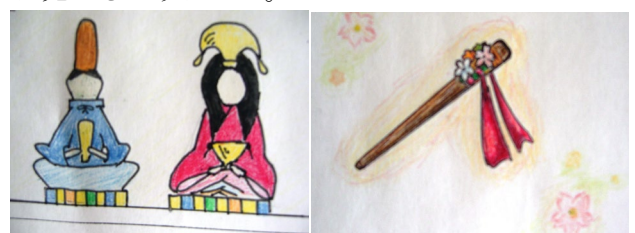


【実践例4】

◆生徒の発表の道具として使用する例2

- ・単元：Multi Plus 1 わたしの日本文化の紹介(NHEC.Book3)
- ・目標：ALTに日本独特の物事について英語で説明することができる。

本単元ではALTを対象に、日本独特の物事について英語で説明する英文を書き、イラストを添えて、掲示することを目標とした。ALTの滞在期間と授業時間の都合により、全員がALTに英語で説明する時間は確保できなかったため、準備ができた生徒から順に発表するようにした。その際、デジタルカメラで生徒の描いたイラストを撮影し、メディアボードを使って学級全体に見せるようにした。





以前はこのような活動を行う場合、教室内の全員が見るに耐えうる大きさの絵を準備することが必要であったが、メディアボードを使用することにより、学習プリントに描かれた小さな絵をデジタルカメラで撮影し、そのデータをコンピュータに取り込むだけで事足りるようになった。そのことにより、準備時間の短縮ができるようになった。また、発表の順番をデジタルカメラで撮影したデータの順番にすることにより、生徒は、いつ、誰が発表することになるのか分からなくなり、緊張感と期待感に満ちた発表の雰囲気をつくることができた。

この授業を通し、デジタルカメラとメディアボードの組み合わせの有効性も認識できた。また、生徒が描いた絵を授業で用いることは、和やかな雰囲気づくりのためにも有効である。現在では、生徒の絵をデジタルデータ化して保管しておき、必要に応じて、授業の導入時などに活用している。



関係代名詞による後置修飾
 関係代名詞 動詞
 This is a man who made Ampamman
 →アンパンマンをつくった 男
 動詞 した・する

5 成果と課題

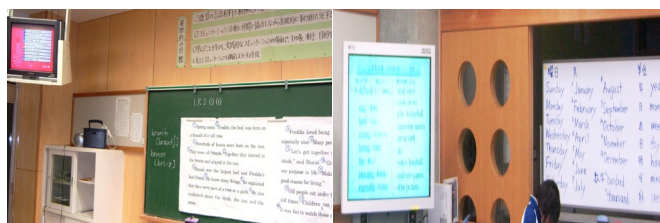
【成果】

・パワーポイントとメディアボードを用いて授業を展開することを習慣化した結果、学習内容

の定着が生徒の様子から確かめることができた。また、教材作成の際に生徒が見やすいフォントの大きさや文字の位置が確立し、類似教材が作りやすくなった。

・過去に使用した教材もデータとしてすべて1つのメディアに保存しておけるので、必要なときに必要なものを引き出すことができ、復習に大いに役に立った。

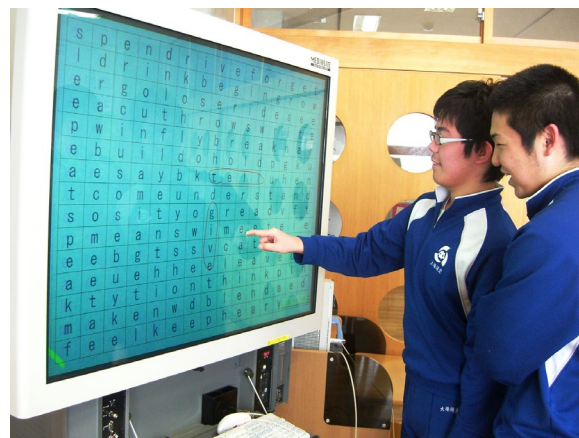
・ビデオ、黒板、メディアボード等の各メディアの長所をつかみ、各メディアの使用場面を考えて授業計画をするようになった。



・委嘱研究2年目になり、少しではあるが研究1年時に作成した教材を、他学年でも使用してもらうことができた。

【課題】

・教師が使用するだけでなく、生徒が使用できるような教材も開発したい。研究2年目は、生徒が積極的にメディアボードを使用する活動も考えたが、メディアボードのタッチスクリーン操作がうまくできないために、積極的に活動を仕組まなかった。少しずつメディアボードに触れる機会を設け、慣れさせていきたい。



・メディアボードと黒板の組み合わせや設置場所についてさらに研究が必要である。特に、パワーポイントに頼りすぎた感がある。書く、消す、貼る、たたく等、教師の体を使ったダイナミックな情報提示ができるのはやはり黒板である。各メディアの長所をさらに活かした授業計画をしていきたい。